

ラフカディオ・ハーンの焼津滞在の意味

那須野 絢 子

How His Stay in Yaidzu Affected Lafcadio Hearn's Life and Literature

NASUNO Ayako

2021年11月4日受理

抄 録

本論文は、ラフカディオ・ハーンの晩年の避暑地であった静岡県焼津市が、ハーンの人生及び文学に与えた影響を彼の交友関係、文学作品から読み解き、その滞在意味を考察したものである。日本各地にゆかりの地が存在するハーンであるが、居住地ではなかった焼津とのゆかりは一般に広く知られてはおらず、焼津滞在と彼の文学活動に関わる先行研究は他の地域と比較すると希薄といえる。しかし、焼津は14年間に及ぶ日本時代の後期にハーンが旅した唯一のフィールドワークの土地であり、この土地で与えられた靈感は、5作品の焼津関連作品のみに帰結したとは言い難い。そこで、本稿では、ハーンを焼津に引き留めた大きな要素である人と海に焦点をあて、両者の出会いの奇縁と、彼が晩年没頭した怪談執筆に焼津の海から得た靈感がどのように作用したかについての一考察を行った。

キーワード：ラフカディオ・ハーン、小泉八雲、焼津、怪談、蓬萊

1 はじめに 焼津との出会い

ラフカディオ・ハーン(1850-1904)は、晩年六度の夏を静岡県焼津市¹で過ごしている。それは、東京帝国大学における英文学講師の職を得て上京した翌年の1897年から亡くなる1904年までの7年間のうちの出来事であった。ハーンと焼津の出会いはい以下のとおりである。大学の夏休み休暇を海のある町で過ごしたいと考えたハーンは、当時浜松中学校で教師をしていた熊本時代からの知人、田村豊久の勧めで舞阪(現浜松市)の海に行った。しかし海が浅瀬で気に入らず、一泊したのみで再び東京方面へ戻る途中に立ち寄った深くて荒い焼津の海が気に入り、長期の滞在を決めたのであった。ハーンの長男一雄の回顧録²によると、ハーン一行の焼津行きは、同地に知人のいた田村が勧めたものであったという³。

1897年8月4日に焼津へ到着したハーンは、セツ夫人、長男一雄、次男巖、セツの養父、女中を伴い秋月楼という料理屋兼旅館に一週間ほど滞在した。しかし宿の主人とのいざこざでそこを飛び出した一行は、田村の下宿先の紹介で、城之腰の魚屋山口乙吉の店に移ることとなった。乙吉との出会いはハーンを焼津に引き留める大きな一因となるのであるが、このことについては後ほど解説する。この第一回目の来焼以降、夏の焼津行は、小泉家の恒例行事となったのである。

以上のような縁で、日本各地にあるハーンゆかりの地の一つとなった焼津であるが、松江、熊本、神戸、東京とは異なり、彼が居を構えて住んだ土地ではない。そのため、ここで挙げたその他の土地と比較し、両者のゆかりの一般的な周知は未だ発展途上といえる。しかし、ハーンの妻セツが夫との思い出を綴った回顧録⁴において、夫の好きな場所を「マルティニーク、松江、美保関、日御碕、焼津」と記していることからわかるとおり⁵、焼津は日本時代のハーンが島根県同様に愛した土地であったことは揺るぎない事実なのである。

旅をとおして土地の人、民俗にふれながら行うフィールドワークがハーンの文学活動の支柱となっていたことは、彼の作品を紐解いた者ならすぐに理解できる。しかし東京時代のハーンは、帝大での講義と執筆に追われ多忙な日々を送っていた。その上、徐々に衰えていく体力から自身の死期を予期し、残された時間でできる限りの作品を残すべく書斎に籠り、執筆に取り組む毎日であった。焼津は、そんなハーンにとって、東京時代に出かけた唯一のフィールドワークの地（横浜など近郊の町へは知人を訪ねる等で赴いているが旅というほどのものではなかった）、つまり作品を紡ぐ際に靈感を与えられる唯一の旅先となったのである。その成果は、“Noctilucae”（「夜光幻想」）、“At Yaidzu”（「焼津にて」）、“Otokichi's Daruma”（「乙吉のだるま」）、“Drifting”（「漂流」）、“Beside the Sea”（「海辺」）、等の作品として結実した。

焼津はハーンの日本における居住地ではなかったために、世間においてそのゆかりが広く周知されているとはいえないことはすでに指摘したとおりであるが、さらにいえば、晩年のハーンが愛した夏の避暑地という関係性以外、その滞在が彼の文学活動や人生に及ぼした影響を深く追求する先行研究が希薄であることも現在の学術的現状として指摘することができる。しかし、この両者の結びつきは世間一般に評されている以上に深いものであると筆者は考える。ハーン作品の中に見られる焼津滞在の影響の詳細な分析は今後の最大の課題であるが、本論考では、それに先駆けて、ハーンの焼津滞在を巨視的にとらえ、文学者ラフカディオ・ハーン、人間ラフカディオ・ハーンにとっての焼津滞在の意味を考えていく。

2. 西田千太郎が結んだ山口乙吉との縁

旅の醍醐味の一つに、訪れた土地で出会う人とのふれ合いがある。異郷に身を置き、土地の勝手がわからない中で、道行く人に親切にされたり、話の合う人物と一期一会の出会いを遂げたり、その人物が土地の者であれば尚更そのふれ合いの記憶は私たち

の旅を美しく彩るものである。旅に生きたハーンも多分に漏れずこのような体験をしたに違いない。

しかし、ここで一つ述べなければならないのは、ハーンは決して自ら積極的に他人と交わるような性格ではなかったということである。この性質は先天性のものではなく、彼の波乱に満ちた幼少時代に起因する。元来のハーンは、茶目っ気溢れる性格で、イギリスでの神学校時代もクラスのムードメーカー的存在であったことが伝記の中に記されている⁶。しかし、両親の離婚、学生時代に負った左目の怪我、養育者である大叔母の破産と学校中退、その後大叔母の庇護からの排斥を余儀なくされたことなど、ハーンの身に災難が立て続けに降りかかったことで、その明るい性格は、極めて内省的な性格に転じてしまったのである。ハーンの左目は、ボールか何か当たった衝撃で半分ほどしか開くことができない具合に潰れ、白濁した。彼は醜くなった自身の左目に生涯強いコンプレックスを抱き、このことは、左目を隠すように横向きで写った後の肖像写真が強く物語っている。また、両親の離婚や、頼ることのできる唯一の存在であった大叔母からの排斥は、幼いハーンに猜疑心の根を植え付け、その根は彼の成長と共に大きくなっていった。家庭の中でも、「人は疑え」という言葉を度々発していたことをセツ夫人が回想しているとおり⁷、その病的なまでの猜疑心のせいで、交友関係も上手く構築することができなかったのである。

しかし、ハーンの生涯と交友を鳥瞰した時、彼が絶対に自分を裏切らないと確信をもって全身全霊で信用した幾人かの人物が存在したこともわかってくる。天涯孤独の身で渡米し、一から人生をスタートさせたアメリカ時代にまで遡りみていくと、ニューオーリンズでの同僚記者エリザベス・ビスランド、マルティニーク滞在時に会った公証人レオポルド・アルヌー、日本に来てからは、松江中学校時代の同僚であった西田千太郎、生涯の伴侶となった小泉セツ、来日後出会った西洋人では珍しく交流が続いたアメリカ海軍士官ミッチェル・マクドナルド、そして焼津での逗留先の家主山口乙吉などがその例として挙げられる。

さて、このような交友関係の中で、日本時代のハーンと強い信頼関係と敬意の念で結ばれ、死が分かつまでその交友を続けた日本人として念頭に浮かぶ人物といえば、松江で出会った西田千太郎と焼津で出会った山口乙吉ではないだろうか。来日最初の友となった西田と、人生最後に絆を育んだ乙吉、ハーンの日本時代の対角線上に位置する二人はハーンにとって一体どのような存在であったのだろうか。以下より、乙吉との出会いがハーンを焼津に引き留めた大きな要因ととらえ、ハーンと乙吉の交友を西田とのそれと比較しながらみていく。

ハーンは、家族とともに初めて焼津を訪れた夏、同行していた田村豊久たる人物の紹介で城之腰御休町の魚屋山口乙吉の家の二階に落ち着くことになったのであるが、焼津祭り⁸を控えた忙しい最中、見ず知らずの外国人客を快く受け入れた乙吉のオープンマインドにまずは感嘆を禁じ得ない。記録に残っている限り、ハーンは焼津を訪れたはじめての西洋人である。文明開化の明治中期とはいっても、当時の焼津はまだ古い日本の姿が残っていた田舎の漁村であった。町の人々は初めて目にする西洋人の

姿に驚いたのではないだろうか。一雄は乙吉の家に到着間もない頃の記憶を、「焼津へ来た当座四、五日ほどは父が海へ行くときも、散歩に出るときも、後からぞろぞろと大勢子供が尾いて来ました。そして乙吉さんに「見世物だ無アヨ」と叱られていました」と回顧している⁹。ハーンはこのような出来事を松江の海辺の町でも経験している¹⁰。いずれの時も、彼は嫌な顔一つせず、微笑ましく日本の子どもたちを見守る心優しい態度で接したのであった。

山口乙吉（1856-1921）は、焼津の漁業発祥の地である浜通りで、「ヤマオト」という屋号を持つ魚屋を営んでいた。一雄は乙吉の性格を「貴賤貧富老若男女の別なく誰にでも正直と誠意を以て、「へへーイ！」と接して行く一本調子の好々爺でした。」と語っている¹¹。そして、「あの人間嫌いの父が東西におけるすべての友人達のあらや臭みが鼻について我慢しきれずそのことごとくを振り捨てるような場合がこうとも、おそらく乙吉さんは終生棄てられぬ唯一人物であつたろうと信じます」と続ける¹²。両者は互いを「乙吉サマ」「先生サマ」と呼び合い、ハーンは乙吉のことを「神様のような仁」といって慕った。ハーンは賄い付きの宿泊料を支払い乙吉宅に逗留していた。しかし乙吉のよこすその請求額が、驚くほどに少ないものであったことがエッセイ“Otokichi's Daruma”において以下のように綴られている。

the amount proved to be unreasonably small. Of course a present was expected, according to the kindly Japanese custom; but, even taking that fact into consideration, the bill was absurdly honest.¹³

そして、そのあまりにも少ない請求に対して、作中のハーンは二倍の額を乙吉に支払う。早朝の汽車で東京に帰る翌朝、ハーンはそれまで片目しかなかった達磨が両方の目を入れてもらって神棚から自分を見つめているのに気がつく。この達磨が、乙吉のハーンへの感謝のしるしであったことはすでに先行研究において指摘されている¹⁴。

このような金銭上の出来事で思い出すのが、ハーンが松江の被差別部落の大黒舞を作品で紹介するために、その原文テキストを西田に手配してもらった際のやりとりである。おそらくハーンは乙吉の時と同様、実費以上の金額を西田に支払ったに違いない。西田はハーンへの書簡の中で、「大黒舞の出費はささやかなものでした。費用の大部分は、使っても実りがありませんでした。わたしはあなたにその支払いをして頂くつもりはなかったのです。確かに過分なお金は、この件が終わるまで預かっておきます¹⁵」と綴っている。ハーンが“Otokichi's Daruma”において、過分な宿代を受け取った時の乙吉の印象を描写した“perfectly natural and at the same time properly dignified”の表現は、この時の西田にも通じるものであったのではないだろうか。

松江士族出身の西田千太郎（1862-1897）は、兵庫県立姫路中学校教諭、愛媛県私立済々学館校長を歴任した後、1888年島根県尋常中学校（以下松江中学校と表記）に赴任する。（1880年から1885年まで教諭補佐として同中学校の教壇に立っている

ので再赴任といえる）松江中学校赴任のためにハーンが同市に到着した 1890 年 8 月 30 日、当時教頭職にあった西田はハーンの逗留先の宿に訪問し、これが二人の初対面となった。西田は結核のため、ハーンが東京に移った翌 1897 年 3 月に亡くなったが、彼らがいかに深い絆で結ばれていたかは、現存する 150 通に及ぶ両者の往復書簡が物語っている¹⁶。チェンバレンやメーソン、教え子たちに宛てられたハーンの手紙と比較すると、難しい文学論や文明論を語るのではなく、学校で起こった出来事や出会った人物とそれらに対する感想や愚痴、執筆している作品の紹介や家族のことなど、極めて素朴な心の内が西田に向けて吐露されている。また、度々記される西田の健康状態を気遣う言葉も大変心を打つ。

この往復書簡を読み進めていくと、西田は亡くなる前年、浅井豊久という新しく松江中学校に赴任した教師をハーンに紹介している。この浅井こそが、先にも記したハーンを焼津に導いた人物、田村豊久であった¹⁷。西田の手紙から察すると、浅井は面識のないハーンを大いに尊敬していたようである。そして同年の夏休み、松江、隠岐、美保関を旅したハーンと彼の家族に浅井は案内人兼世話役として同行し、交流を深めた。ハーンは手紙の中でしきりに西田と隠岐や美保関へのショートトリップを楽しみたい思いを綴っているが、西田の病状からそれが思うように実現しなかったため、西田本人の計らいで浅井をハーン一家に同行させたのではないだろうか。それでもハーンと西田は松江、杵築（出雲）において旧来のような時を過ごし、1896 年 8 月 20 日、西田の見送りを受けて松江を去り、これが二人の今生の別れとなった。8 月 24 日、ハーンは神戸から西田に宛てた手紙の最後を、「わたしたちは皆、来年はあなたと一緒に夏をすごせたらと思います」と結んでいる。

しかし、翌年の 3 月に西田がこの世を去ったため、ハーンのこの願いが叶うことはなかった。松江、出雲で西田と最後の夏を過ごした一年後の 1897 年 8 月、ハーンは焼津で避暑を過ごしていた。そして、先だった西田の代わりを務めるかのようにこの地でハーンの側に寄り添ったのが、山口乙吉であったことの奇縁を以下のように説明するのは牽強付会であろうか。親友を思いやる西田の深い念が、田村（浅井）豊久を介して自分が亡き後のハーンの心の支えになる山口乙吉との縁を作った。焼津は、そんなハーンと西田の深い友情によって縁が結ばれた山口乙吉との更なる友情を育んだ土地であったのである。

3. 海が与えたカタルシス

次に、ハーンを焼津に引きとどめた第二の要因である海との関わりについて考えたい。ハーンはイオニア海に囲まれた美しい小島レフカダで生を受けた。このことが奇縁となっただけでなく、その後、アイルランド、ウェールズ、西インド諸島マルティニーク、日本と、彼の赴く先にはいつも海が開けていた。というより、ハーン自身が海を求めて旅をしたという表現の方が正しいかもしれない。両親と生き別れた後に養育者となった大叔母サラ・ブレナンは、幼いハーンをアイルランド南西部のトラモア海岸に

連れて行き、彼はそこで生まれてはじめて海での遊泳を体験する。以降、水泳はハーンの生涯の趣味となるのであるが、村松眞一が指摘しているとおり、海はハーンにとって、避暑や海水浴などといった意味以上のものがあり、水泳を楽しむことで心身ともに海との一体感を感じていたのである¹⁸。

日本におけるハーンの遊泳体験は大雑把に、松江、熊本、神戸時代の山陰地方での遊泳と、東京時代の焼津でのそれとに分けられる。水泳好きのハーンというイメージから、日本各地の海で泳いでいたようなイメージも抱かれがちであるが、日本で彼が親しんだ海は意外にも島根、鳥取の日本海と静岡の駿河湾のみなのである。すると必然的にハーンが日本で手がけた海の文学もこの両地方を取材したものということになる。山陰の日本海が舞台となっている代表的な作品としては、“In the cave of the Children’s Ghosts”, “At Mionoseki”, “By the Japanese Sea”, “From Hōki to Oki”などが挙げられる。一方ハーンが焼津で取材した海の文学には、“At Yaidzu”, “Drifting”, “Beside the Sea”, “Noctilucae”がある。これらはいずれも日本の地方における著者のフィールドワークをとおして生まれた作品群であることに違いないが、日本時代の前期に記された山陰での記録と、後期に記された焼津での記録とでは、ハーンによって取材された素材の描かれ方が異なる。前者は、西洋圏に向けた知られざる山陰地方の観光案内としての執筆意図も含まれていたために、民俗学的な視点で捉えられた海にまつわる民俗や怪談を披露したルポルタージュ作品として仕上がっている。これと比較し焼津での作品は、例えば灯籠流し、施餓鬼供養、海の怪異など、山陰での記録と同様のモチーフが使われていても、その描かれ方から民俗学的な要素が薄まり、より文学的、哲学的な作品へと変化を遂げていることは読者にとっては察するに難くない。以下よりその事例として、焼津で体験した盆の夜の瞑想が語りの中心になっている“*At Yaidzu*”（以下「焼津にて」と記載）を挙げ、焼津の海がハーンに与えた影響を考察していく。

「焼津にて」は、1899年刊行の *In Ghostly Japan* に収録された。当時の焼津海岸の風物を写實的に描写した第一章にはじまり、続く第二章では、盆の灯籠流しの体験が綴られる。この二章は、灯籠流し体験に触発されてハーンの海への思いが深まり、本論、つまり第三、四章へ入っていく導入部のような役割を担っている。この作品と、それ以前に記されたハーンの海の文学とを分かち重要な要素は、著者の耳が海の音を捉え、その音が過去に遡及し、ハーンを何かの「達成」「完結」とも呼べるような極地へと導いているところであろう。「焼津にて」と似通った雰囲気を持つ作品に、松江時代の“*By the Japanese Sea*”（以下「日本海に沿って」と記載）がある。この作品によると、ハーンは鳥取の浜辺で灯籠流しを見物し、精霊の流れ出た海の音に耳を傾け、その海が発する声、“the mattering of the real sea—the vast husky speech of the Hotoke-umi”（「本物の海の声—仏海がごうごうと放つしわがれ声」）を聞き取っている。そしてそれから6年の歳月を経た1897年の夏、今度は太平洋に面した駿河湾を望む焼津の岸辺にたたずみ、彼は同じく精霊の流れ出た仏海の声に耳を澄ませた。その時の随想が「焼津にて」の第三、四章なのである。このような視点から「日本海

に沿って」及び「焼津にて」の第三、四章を読み進めると、後者は前者の続編的な意味合を持って記された作品のようにも感じられてくる。なぜならば、ハーンは焼津の海の音の中に、日本海で聞いた海の声の正体を捉えているからである。

焼津の海は深くて荒い。悪天候に見舞われると、駿河湾から押し寄せる高波が町を覆うため、焼津の人々は昔から水害に悩まされてきた。そのため、明治に入り町を高波から守るための石積み堤防が築かれた。（この堤防に関してはハーンが「焼津にて」の第一章で紹介している）このような焼津の荒海が発する轟は、視力の悪いハーンの鋭敏な聴覚を間違いなく刺激したであろう。ハーンは焼津の海が発した音を「焼津にて」において以下のように描写している。

For as I listened to that wild tide of the Suruga coast, I could distinguish nearly every sound of fear known to man: not merely noises of battle tremendous, — of interminable volleying, — of immeasurable charging, — but the roaring of beasts, the crackling and hissing of fire, the rumbling of earthquake, the thunder of ruin, and above all these, clamor continual as of shrieks and smothered shoutings, — the Voices of that are said to be the voices of the drowned. Awfulness supreme of tumult, — combining all imaginable echoings of fury and destruction and despair!¹⁹

ハーンはつまり、人間の知るところのあらゆる「恐怖の音」を駿河湾の轟きの中に聞いたのであるが、ここで語られた音の描写の中に、筆者は少年時代のハーンがロンドンで聞いたある音との関連性を発見した。それは、1905年7月28日発行のイギリスの週刊誌 T.P's Weekly に掲載された、アショーカーレッジ時代の友人 Achilles Daunt がハーンとの思い出を綴った記事にみられるものである。未だ全容が明らかになっていないハーンのイギリス時代であるが、N. ケナードの伝記によると、アショーカーレッジ中退を余儀なくされたハーンであったが、同級生で気の合った Achilles とはしばらくの間書簡のやりとりをしていたという。残念ながらそれらの所在は不明であり内容のすべてはわからないのであるが、この記事の中で Achilles は、ハーンが彼に宛てた書簡の一端を以下のように語っている。

In a letter received from him while living in that dreadful places, he described the sights and sounds of horror which even there preferred the shade of night — of windows thrown violently open, or shattered to pieces, shrieks of agony, or cries of murder, followed by a heavy plunge in the river.²⁰

第三者の筆をとおしての描写であることが遺憾ではあるが、「焼津にて」の一節と比較すると、ハーンがイギリスの dreadful places で聞いた「苦しみ悶える人の叫び」

「殺される人の悲鳴」「人が川に飛び込む激音」、これらは間違いなく、先に示したハーンが駿河湾で聞いた人間が知るところの「恐怖の音」と呼応している。養育者であった大叔母の破産によりアショーカーレッジを去ったのが1867年10月、その後ハーンは1869年に渡米するまでの時間を天涯孤独の身となりロンドンで過ごしている。この間の足取りに関する確固たる記録は残っていないが、後にハーン自身が、イーストエンドをあてどなく彷徨い、浮浪者のごとき生活を余儀なくされていたこと、無一文の身でロンドンにいることの恐ろしさなどを断片的に語っていることから、この二年間が彼にとってどのようなものであったかは大方見当がつく。両親に棄てられ、親戚にも裏切られ孤独の身となった少年ハーンは、人口密度が極めて高く、ヴィクトリア時代のロンドンで最も不潔な地区であったイーストエンドの恐ろしい場所（dreadful places）を転々としながら震えていたのであろう。隙間風が吹きすさぶあばら屋のような場所にも寝泊まりしていたのだろうか。ガラス戸に吹き付ける風の音に、ハーンは人間が発する「恐怖の声」を聞いたのである。

そして、30年の時を経、極東の国の焼津に身を置き、その海が発する轟の中に再び「恐怖の声」を聞いたハーンは、その中にロンドン時代と同様の音響を聞き取り、当時を回顧したのではないかと推測する。「焼津にて」最終章において、海の音が発する悲しみと苦しみ的心声を、音楽における低音部に位置づけ、必要不可欠な低音部の価値を語ったハーンは、それまで背をむけてきたアイルランドやイギリスでの過去を焼津の海で受け入れることができたのではないだろうか。その証拠に、彼は以下のような言葉でこの作品を締めくくっている。

Somewhere it is said that human life is the music of the Gods, — that its sobs and laughter, its songs and shrieks and orisons, its outcries of delight and of despair, rise never to the hearing of the Immortals but as a perfect harmony…²¹

晩年、心臓発作に悩まされていたハーンにとって、焼津での遊泳は健康面の観点からは決して推奨できるものではなかったはずである。それにも関わらず彼は亡くなる一ヶ月前まで焼津の海とともにいた。以上のことを考えると、焼津の海は死期の迫ったハーンにとってある種のカタルシスを与える存在となり、ハーンはそのほとりに佇み、「ラフカディオ・ハーン」という一人の人間の織りなした人生のハーモニに耳を澄ませていたのではないだろうか。

4. 焼津滞在と怪談－「蓬萊」の考察

最後に、ハーンの焼津滞在が彼の文学活動に与えた影響について考察する。本論第一章においても述べたとおり、焼津はハーンの日本時代後期における唯一のフィールドワークの地であった。この日本時代後期とはつまり、1896年9月に神戸から上京し、

1904年9月に没するまでの東京時代を指す。そして、1897年、1899年、1900年、1901年、1902年、1904年のいずれも8月（1902年は7月からの約二ヶ月に及ぶ滞在であった）に決行されたハーンの夏の焼津行きはこの期間にぴったりとはまるのである。ハーンは焼津で取材した素材を利用し、先にもあげた5つのエッセイを記しているのであるが、貴重な東京時代のフィールドワークの場であった焼津での体験が、この5つの作品のみに帰結したとは考えにくい。東京でのハーンは、日本の民話や古典を材料にした怪談再話の執筆を本格化させ、徐々にその作業にのめり込んでいった。その証拠に、1899年に出版された *In ghostly Japan* から登場しはじめた怪談作品は、以降徐々に著作内での収録数が増え、ついには17作品の怪談を収録した *Kwaidan* (1904、以下『怪談』と記載) に行き着くのである。ハーンの焼津滞在は、このような彼の怪談執筆に密かな靈感を与えていたのではないだろうか。

このことを証明する興味深い先行研究に、中田賢治の「焼津の海と「耳なし芳一のはなし」」²²がある。ここで中田は、『怪談』に収録された「耳なし芳一の話」の中で、芳一が語る壇ノ浦の戦いの描写を、前章で紹介した「焼津にて」第三章における海の音のそれと比較し、類似性を指摘している。以下が芳一の壇ノ浦合戦の語りである。

— wonderfully making his biwa to sound like the straining of oars and the rushing of ships, the whirr and the hissing of arrows, the shouting and trampling of men, the crashing of steel upon helmets, the plunging of slain in the flood.²³

芳一の琵琶から発せられる、矢が唸りながら飛び交う音、武士の叫びや船板を踏みならす音、兜に鋼鉄の刃が砕ける音、斬り殺された者が海に飛び込む音は確かに、本稿第三章でも挙げた焼津の海の轟にハーンが聞いた音と呼応する。ハーンは『臥遊奇談』巻之二「琵琶秘曲泣「幽霊」」を原拠にこの物語を再話しているが、上記のような芳一の奏でる琵琶の音響の描写は原典には見られない。故に中田の指摘するとおり、ハーンが焼津の海潮音に靈感を受け、このくだりを描写したことは大いに考え得る。

そしてさらにここでは、焼津での体験がハーンの怪談執筆に靈感を与えたと思われる事例として、夜光虫で輝く焼津の海に触発されて書かれた“*Noctilucae*”（以下「夜光幻想」と記載、『影』1900収録）と、ハーン没年の1904年に刊行された『怪談』収録の“*Hōrai*”（以下「蓬莱」と記載）との関係を考えたい。「夜光幻想」は、ハーンの宇宙的幻想をもって語られた魂の哲学の散文詩ともいえるエッセイである。この作品において、“the Ultimate Ghost”（「究極の大霊」）が流れ出る大霊の海と向かい合ったハーンは、自分自身もその大霊の一分子となり、思想の変化に応じて様々に色に変え、それら分子の光の明滅が幾億兆と寄せ集まり最高位の白い光を作ることを悟る。村松眞一はこの悟りを、ハーンの芸術家としての使命の自覚と彼の安心立命の暗示と捉えているが²⁴、人間の死生観の結論としてここで示された「究極の大霊」の観念は、『怪談』に収録された「蓬莱」の中でも以下のように描かれている。

It is an atmosphere peculiar to the place ; and, because of it, the sunshine in Hōrai is *whiter* than any other sunshine, — a milky light that never dazzles , — astonishingly clear, but very soft. … It is not made of air at all, but of ghost, — the substance of quintillions of quintillions of generations of souls blended into one immense translucency, …²⁵

蓬莱の持つ無数の靈魂の寄せ集まった霊的な大気は、通常の陽の光より白く、乳白色の澄んで柔らかい光であると説明されているが、ここでハーンが“whiter”をイタリックとして強調していることから、白が特別な意味を持つ色として暗示されていることがわかる。「夜光幻想」において語られた、幾億兆の光、つまり人間の魂が混ざり合うことにより発せられる最高位の白い光の世界をハーンは蓬莱にも持ち込んだのである。しかし、作中の蓬莱は“Evil winds from the West”（「西から吹く邪悪な風」）によって徐々に小さくなり、蜃気楼のごとくやがて消え去ってゆく。

このような結束から、先行研究において「蓬莱」は、西洋化により古き良き日本が消滅していくことに対する嘆きの歌と評価されることが多い。確かに日本時代のハーンは、彼がユートピアを見た旧日本と西洋文明の流入で近代化する新日本、はたまた、自身の西洋人としてのアイデンティティと日本人としてのそれとの間で激しく揺れた。その振り子がどのような着地点を見いだしたかについての詳細な分析はここでは行わないが、ハーンの東西間の動揺が、「蓬莱」の評価として語られるような嘆きで終わったという結論には少々誤解がある。なぜならば、「焼津にて」や「夜光幻想」において、ハーンは人間の死生と海、神々の音楽と人生との関係など、いくつかの悟りの境地を体験しているからである。村松眞一が、「夜光幻想」におけるその悟りを、芸術家としての使命の自覚と、ハーンの安心立命の暗示と指摘していることはこのことを考える上で大変興味深い²⁶。焼津の海で安心立命の境地に達したハーンは、作家として残された時間の中でやり遂げなければならない使命のようなものを感じたのではないだろうか。それが、本章はじめに解説した日本時代後期に一心不乱に打ち込んだ怪談執筆だと筆者は考えるのである。

ここで思い出されるのが、ハーンと同じく旧日本をある種の理想郷に例え、文明化によるその崩壊を嘆いたピエール・ロチ（1850-1923）の印象記『日本秋景』（原題 Japoneries d'Automne (1889)）である。この作品は、文明開化の日本に見られる和洋折衷の風物の滑稽な様を描き出したロチの日本に対する印象が作品全体を支配する。しかしそこには、文明化による旧日本消滅への著者の嘆きが表裏一体を成していることも忘れてはならない。古都鎌倉の鶴岡八幡宮を訪れた後、人力車に揺られ文明開化の地横浜へと帰ってきたロチは、同作品において以下のように綴っている。

そして、ついに、われわれの前に長く列をなしたガス灯が輝き始め、文明の、すなわち鉄道の機関車や汽車のはるかなざわめきが響いてきた。（略）さあ、着

いた、横浜だ。大いなる近代のガラクタ山、古きものの残滓にのかった、にわかづくりの新しい日本である。そこで、ついさっきまであの神社で聖遺物や仮面に囲まれていたわれわれは、どれほど遠い過去にいたのかを思い知らされたのである。―謎に満ちた過去がどの方角にあったのかも、もうすっかりわからなくなってしまった。²⁷

古の都鎌倉にみたような旧日本は、西洋文明の流れ込んだ新日本の出現とともに永遠に消え失せたことを著者の嘆きとともに表現した一節である。しかしハーンとは異なり、古きから新しきに移るこの日本の変化は、ロチにとって歴史、そして自身の旅の一通過点でしかなかった。彼は日本の過去を回顧もしなければ、遡及もしない。長崎で一時同棲し、小説のヒロインにもなったお菊さんとの関係も、同様にこのところを物語っている。フランスの小説家でロチと同じく海軍士官として東洋の地を回ったクロード・ファレール（1876-1957）の言葉を借りれば、ロチは日本をただ眺めて、そして通り過ぎていった人物であったといえよう。

さて、ハーンのことを話を戻そう。彼は焼津の海に入ること作家としての使命観をますます強くし、結果、東京では半ばとりつかれたように怪談の執筆に没頭した。そうして出来上がった数々の怪談作品において、死と生の問題と向き合い、消え去りゆく古き良き日本の姿を書きとどめ、また、自身の過去をも回顧したのである。このように考えると、芸術家、そして一人の人間ラフカディオ・ハーンが記した怪談作品が、生前最後の著書『怪談』において集大成を見せたことの所以が解ってくる。『怪談』には17作品の再話怪談が収録されているが、「蓬莱」がその巻末に添えられていることの意味は大きい。ハーンはこの作品を以下のように締めくくっている

Remember that Hōrai is also called Shinkirō, which signifies Mirage, — the Vision of the Intangible. And the Vision is fading, — never again to appear save in pictures and poems and dreams...²⁸

先に記したとおり、ハーンが愛した旧日本という理想郷が永遠に消え失せることへの悲嘆で作品が終わっているようにも解釈されうる内容であるが、最晩年の『怪談』の持つ意味を考えると、ここで暗示されたものは嘆きではなく、作家としての使命を果たした著者の内なるエコーのように感じられはしないだろうか。焼津の海における悟りに導かれ書き上げたその他の怪談作品を顕示するかのように、ハーンはこの最後の執筆で、旧日本や自身の人生が、時間軸上の現在という空間から消え去りゆく運命であることを肯定し、それらを文学の中で書き残し守る (save) という使命を果たしたことを表現したのではないだろうか。このような思索にふけていると、焼津はハーンにとって、一人の人間としての過去、文明史における日本の過去、そして霊的存在としての人間の過去と向かい合い、それらを作品の中に紡いでいくことでどんなものにも動じない精神的安定を得ることのできた運命の場所だったのだと思われてならな

いのである。

¹ ハーンが初めて来焼した 1897 年当時は焼津村であったが、1901 年焼津町となった。

² ハーンの長男小泉一雄が、幼少時代の父との思い出を綴った回顧録『父「八雲」を憶う』。1931 年 7 月警醒社刊。

³ 小泉一雄『父「八雲」を憶う』恒文社、1994、p.303。

⁴ 『思い出の記』。田部隆次『小泉八雲』（1914 年早稲田大学出版部）の中で初めて全文が紹介された。

⁵ 小泉セツ『思い出の記』恒文社、1994、pp.43-44。

⁶ N.H.Kennard, *Lafcadio Hearn*, Eveleigh Nash, 1912, pp.61-62.

⁷ 小泉セツ『思い出の記』恒文社、1994、p.38。

⁸ 江戸時代から続く「東海一の荒祭り」として知られる焼津神社の大祭。毎年 8 月 12 日、13 日に開催される。乙吉の家のあった浜通りは、神輿渡御のルートであり、現在においても祭りの期間は大いに活気づくエリアである。一雄の回想によると、ハーン一行は 8 月 4 日焼津に到着し一週間ほど後に乙吉宅へ移っているため、祭り前夜の多忙な時期であったに違いない。

⁹ 小泉一雄『父「八雲」を憶う』恒文社、1994、p.310。

¹⁰ “In the Cave of the Children’s Ghosts” 参照

¹¹ 小泉八雲『父「八雲」を追う』恒文社、1994、p.313。

¹² *Ibid.*

¹³ Lafcadio Hearn, *The Writing of Lafcadio Hearn 10*, Rinsen Book Co.,1988, p390.

¹⁴ 村松眞一『靈魂の探求者小泉八雲』静岡新聞社、1994 参照。

¹⁵ 松村真吾『ラフカディオ・ハーン 西田千太郎往復書簡』八雲会、2020、p.112。

¹⁶ 2020 年に村松真吾氏によって編集された『ラフカディオ・ハーン 西田千太郎往復書簡』には、これまで分散していたすべてのハーンと西田の往復書簡が翻訳を施され収録されている。

¹⁷ 出生名田村錠太郎、後に浅井豊久に改名し、さらに田村豊久に姓を戻している。旧清水藩士族。

¹⁸ 村松眞一「八雲と焼津」（『講座小泉八雲 2 ハーンの文学世界』）新曜社、2009、pp.588-589。

¹⁹ Lafcadio Hearn, *The Writing of Lafcadio Hearn 9*, Rinsen Book Co.,1988, p368.

²⁰ “LAFCADIO HEARN Recollection of Paddy Hearn at College” から引用。

²¹ Lafcadio Hearn, *The Writing of Lafcadio Hearn 9*, Rinsen Book Co.,1988, p370.

²² 小泉八雲顕彰会『八雲 22 号』、2010、pp.27-32。

²³ Lafcadio Hearn, *The Writing of Lafcadio Hearn 11*, Rinsen Book Co.,1988,pp.166-167.

²⁴ 村松眞一「八雲と焼津」（『講座小泉八雲 2 ハーンの文学世界』）新曜社、2009、p.600。

²⁵ Lafcadio Hearn, *The Writing of Lafcadio Hearn 11*. Rinsen Book Co.,1988,p265.

- ²⁶ 村松眞一「八雲と焼津」(『講座小泉八雲 2 ハーンの文学世界』) 新曜社、2009、p.600。
²⁷ ピエール・ロチ『日本秋景色』(市川裕見子訳) 中央公論新社、2020、p112。
²⁸ Lafcadio Hearn, *The Writing of Lafcadio Hearn 11*, Rinsen Book Co.,1988,p267.

